

広島俳句倶楽部

令和二年五月作品集

ベランダからの風景

美耶

朝日が昇ると、鳥々へ船が動きだす。昼、移りゆく日に海は輝き、空を染めて太陽が沈むころには、対岸にボツボツと灯がともる。夜の帳が下りると、月が海を照らす。私の住む、瀬戸内海に面したマンションの一室からの、日々の風景である。今は、湾岸の山から囁りが聞こえ、ベランダでは、鉢植の薔薇が咲きはじめた。素朴な日常の中に、四季の移ろいを楽しみながら暮らしている。

春暁の海すれすれに月懸かる

遠山の端より春日あたりたる

霞晴れ対岸に町現はるる

行く船に鷗の群れて春の昼

うつすらと海に架かりて春の虹

春の海一羽のかもめ浮いてをり

もどり来る船静かなり春の夕

春の暮橙色の日の沈む

ベランダに薄日の差して日永し

ベランダの薔薇の古木の芽立ちかな

佐保光俊

大桜日は昇りつつ照りまさり
ひよどりが桜の枝をつかみけり

村上正人

宵星の沈んでゆける桜かな
照らさるる桜の光の黒き空

あざみ

花咲いて波の揉み合ふ船着場
寄進する酒ぶら下げて花月夜

亜矢

花の昼輝いてるる鳥の羽
桜薬降り積もりたる川辺かな

敬子

満開の桜の下に佇めり
見上げたる吾に一ひら桜散る

暁子

桜へと沖より絶えず波の寄せ
夕桜向かひの島に灯の点り

高尾ひとみ

桜狩初めての道通りけり
真夜中の風に揺れたる桜かな

ちどり

玄関の椅子に座りて花を見る
段畑に植ゑし桜の爛漫と

松本恵和

みづうみを囲む千本桜かな
その村に花の名所のありにけり

美耶

花散るやバス待つ人の肩の上
花筏寄りては離れまた寄りぬ

阿姫

ふるさとの山をうづめる桜かな

阿波久

桜咲きピンクの色に励まされ

井藤希

大桜幹より花の咲きにけり

栄吉

遅咲きの桜の散つて道埋む

遠藤さつき

人居らぬ名所に花を惜しみけり

大橋博子

夕暮の花の大枝揺れにけり

大畑恵

夫と行く土手沿ひの道桜舞ふ

紀英子

しだれ桜濃きも薄きもありにけり

熊谷ゆり子

日のあたる雁木に座り花を見る

桑門わかこ

御堂へと枝垂桜をとほりけり

白神陽子

我が句載るばんばり見上げ花見かな

民

花筏細き川面を流れたる

ちかこ

手のひらに落花のせたる女の子

友岡葉山子

花満ちて右に左に鳥の飛ぶ

撫子

桃色の月の照らして花の山

ふじ女

嘴の震わす花の散りもせず

穂高

泉邸の団ざされてゐて飛花落花

松田裕子

花の雨轍に小さき水たまり

幹

花の道古称で記す道しるべ

みさ子

夜の花一枝羽織り見にゆけり

宮田保江

五重塔花の向うに見えてをり

森口良樹

たつぷりの湯舟に見上げ大桜

やす保

せせらぎに沿うて歩ける花見かな

花かりん坂の下くる人の声

一本の桜へと橋架かりたる

海まではすこし距離ある桜かな

子がひとり雨の桜に来てをりぬ

母が子を呼びに来てゐる桜かな

昼月にひとしきり降り春落景

快晴の三日つきの残花かな

御空より俄に蝶の降りて来し

寺の前通る街道藤の花

桜咲いて深まりにけり空の青

佐保光俊

春霖や橋渡りつつ川を見る

池の面に水輪重ねて春の雨

雨粒の残る牡丹に日の差せり

山の道下れば蛙鳴いてをり

芍薬に山からの風吹いてをり

鼻寄せて石鹼玉嗅ぐ仔犬かな

行く春や通りに人の姿なく

花水木咲く茶店へと橋渡る

宵星の明るさ増せり夏隣

明易し早朝からのテレワーク

村上正人

校庭に沿うて桜の花盛り

山羊を飼ひチャボを放して花の宿

睡みつ蝶の飛び交ふ畑かな

風光る宮に立てたる大漁旗

大枝に大きな毛虫這うてをり

どくどくと代田に水の入リたる

母の目に青きリボンの花届く

早々と灯す卯の花腐しかな

湯き水に手を浸したり山法師

夏座敷裏山の風通しけり

あざみ

沈丁やセールスマンの長話

手に馴染む字引をめぐり春時雨

ジヨギングの足音過る春の夕

春の水山より出てて下りけり

黒土の畝の高さやつばくらめ

うぐひすの一声ごとに響きたる

子供の目母と子の靴並びたる

山藤の絡まつてゐる竹の藪

中程でばつさり切つて鉄線花

はつ夏や如雨露いつばい水を入れ

亜矢

堰を越す水に近づく紋白蝶

釣舟を舫ふ岸辺に葦芽ぐむ

ひとり住む家に咲きけり紫木蓮

薯を植う母と背中に風を受け

桜葉散り敷く道を歩きけり

ひらり又ひらり残花の散りにけり

牡丹の花弁崩れて重なれり

鈴蘭を厨に挿して仄かなり

一枝は窓へと伸びて桐の花

青空を奪ふがごとく樟若葉

敬子

山藤の川の向うに掛かりけり

水の音御堂に聞こえ蝶の昼

木の花に影してゆけり揚羽蝶

暗がりに木の花匂ひ春惜しむ

五月来る谷間に白き花咲いて

陸橋に衛星を追ふ初夏の夜

寺町の路地を飛びけり夏燕

根元まで箒目引かれ夏椿

踏み板を揺らし川原へ花散

青葉風瀬音だんだん遠くなり

暁子

春の昼ベンチに少女二人居て

畔道に立ちて蛙の声を聞く

大樟に五月の風の吹きにけり

風そよぐ若葉の下を歩きけり

植田へとやや強き風吹いてをり

山裾の家まで続く青田かな

山法師だんだん雲の厚くなり

花さびた今にも雨の降りさうに

宵までの窓に卯の花腐しかな

ことごとく青菜の道となりけり

高尾ひとみ

父の墓見下ろす春田打ちにけり

菜の花や足踏みミシンかけてをり

裏山に鶯の鳴きをり春の夕

家の跡墓所となりて初蕨

湯治場の湯けむり上がる桜かな

車から母に見せたる八重桜

二階から見る満開の梨の花

一つつつ水田の増えて桐の花

溝浚へ終へ高台に集まりぬ

遠方の子より届いて日輪草

ちどり

野つ原の桜に墓産を数く親子

鳥立ちて花の一枝揺れにけり

支へ木の歳本枝垂桜かな

音立てず猫の歩める日永かな

一枝を引き寄せ松の緑摘む

山道を横切つて行ききざすの子

筍の皮剥く子らの笑ひ声

月光を全身に浴ぶ五月の夜

灯を消せる部屋に五月の月の差す

雲と雲夏の朝日に輝けり

松本恵和

春苗母への文を書いてをり

春の夜の対岸の灯を見てゐたる

春嵐ビルの間を吹きにけり

林道のいく度も曲り山笑ふ

春月の影の揺れたる水田かな

暮遅き路地に灯火の見え始む

春の雨薔薇の蕾にかかりをり

ベランダの大輪の薔薇咲き揃ふ

バラ開花朝な夕なに眺めけり

開きたる薔薇の枝切り日課とす

美耶

夜の更けて流せし雛を思ひをり

参りたる暮の春草抜きにけり

春日影道の向うへ手をかざす

名を呼んで返事なき家牡丹の芽

花水木バスは団地を巡りをり

傘さして振り返りたる杜若

花田植たすきの色の赤と青

泥落し男の脛の細きこと

桑門わかこ

桜餅赤子笑へば皆笑ふ

高階に桜並木を見下ろしぬ

景桜の影に市電の止まりたる

スコップの転がつてゐる緑雨かな

てんとむし爪の光より飛び立ちぬ

撫林を抜けて汲みたる岩清水

梅雨鴉二三步跳ねて飛びにけり

夏草や中洲に廻るシヨベルカー

松田裕子

雉啼いて山の中へと消えにけり

目薬を袍に入れて花を見に

春宵の街を照らせる大き月

夫の里訪へば鶯鳴きしきる

更衣八十路なれども旅心

シロナガスクジラの形夏の雲

雲海の島のごとくに山の峰

阿姫

夏立つや母の見舞に橋わたり

実桜の柄の散らばれる坂の道

前山の巖を覆ふ新樹かな

若景雨ソファに犬の眠りたる

夕刻のサイレン鳴りて樟若景

芍薬の鉢が隣家に並びたる

石楠花を見に高速を運転す

井藤希

春月に組板を干す厨かな

春月の映る水面に鯉の跳ね

夕暮の風さらさらと立夏かな

庇打ち五月の雨の音しきり

薰風や藩主の門の太きこと

いちまいの板の渡し場若景風

石垣の角を曲がれば夏の嶺

大橋博子

少年は蒲公英の絮構へけり

流滞へサイレン走る暮の春

衣替えせずに眺めるワンピース

せつけんの容器の軽し初夏の朝

展望の山は島なり夏霞

曇天の隅に山法師の真白

ニスはのかデッキの陰にマーガレット

ふじ女

叱らぬと決めて過ごせる子供の日

棚田より水引き入れて燕子花

昼になり軽油継ぎ足す草刈機

ここからは斑の変はりて溝浚へ

木洩れ日にしづきの見ゆる滝見茶屋

愚図る子の添寝の窓に夏の月

万緑や太平洋を背ナにして

森口良樹

木洩れ日の届いてるたるエビネ欄

鳩の声若葉の庭に聞いてをり

野苺のはのかに香り白く咲き

緋牡丹の二人暮しの庭に咲く

白鷺の見つめる光の川面かな

母の日の日本酒の瓶可愛らし

大畑恵

森の香の中にみ寺の春來たる

弥生かな八十一を生かされて

切株に小さき蛙の鳴きにけり

雨止みて牡丹一輪咲きにけり

石楠花の濃いも薄いも籠に生け

ばうたんの最後の花は黄色なり

あちこちにあやめ咲きたる休耕田

カラカラと矢車回る日中かな

畦道の文字摺草に風の吹く

妣植ゑし紅き牡丹に妣の傘

とりどりに羅を着て茶会かな

ヘリコプター青嶺を越えて飛び去りぬ

曇天に枝広げたる桜かな

花の下父と並んで写真撮る

古寺の枝垂桜を見上げけり

行く春や夫を相手に話しをり

景桜の下のベンチに本を読む

瀬戸の島結ぶ橋あり夏霞

紀英子

友岡葉山子

撫子

巣作りの燕せはしく飛び交へり

父と子の一緒に走る五月かな

牡丹咲くぼうたん色の牡丹咲く

ぼうたんへ顔を寄せたる男の子

そつと触れそつと触れたる茅花かな

噴水が上がれば子ども飛び跳ねる

穂高

窓開けて囁き聞く朝かな

蝶々の部屋に入り来る真つ昼間

新キヤベツ柔らかくあり甘くあり

家居して桜見てゐる一日かな

崖縁にしたら咲きたる菫かな

退院の青空に見る鯉幟

宮田保江

父上がいつも食べてた干鰯

朝涼し黄身が二つの目玉焼き

よく熟れたバナナが好きな母想う

蝸牛肌にぬめりと進んでく

気持ち良く昼寝している痩男

阿波久

風船の転がつてゆく日暮かな

囀のツツピーの音聞き分ける

公園の水場の傍の小判草

らつきよ剥く洗濯物を干す横で

汗ばみて息子と洗ふ自家用車

栄吉

孫からのテレビ電話や春の風

蒲公英の絮吹く母と来た小道

著莢の道敷珠と線香携へて

あやめ池花から花へ系とんぼ

輝きを残して消ゆる青蜥蜴

白神陽子

コロナ禍は人に潜みて春嵐

春灯の点かぬ空家のボツリボツリ

たすき掛け新茶もてなす乙女かな

村あげて川に鯉幟を渡す

英一

制服の子を見かけたる春の朝

夏草や子を追ひ越して駆け下る

風蘭の香りに闇の深まりぬ

レシートに匂を書き留める五月晴

熊谷ゆり子

大潮の流れの止まる春の川

薰風にハモニカの音聞こえたる

牡丹散り雄蕊の二十並びをり

夏草の中にバットの忘れもの

ちかこ

白牡丹着物の人と見てゐたる

手を掛けし牡丹しばらく見てをりぬ

牡丹に夕暮迫りほの白き

牡丹のひとひら鉢にもどしたる

みさ子

落飯を好みし父に供へけり

蚕豆の莢を剥きたる幼き日

縁側に筍三本置かれたる

遠藤さつき

太陽に背を向けてゐるあたたかさ

草花のどれも新芽を付けてをり

青豆の莢を取る手に春日さす

かこ

強き雨たんばの絮叩きたる

大根島牡丹一鉢買ひにけり

豆飯の香りて莢は積まれたる

民

藤棚の自慢話のきりもなく

行く春や旅の約束果たされず

夏は来ぬ日々万歩計持ち歩き

整体師春行くことを云ひにけり

新緑の濃淡となる里の山

園庭の人に幟のはためけり

叔父逝きて牡丹の花の咲きにけり

野地蔵に花擬宝珠と水供ふ

はればれと戸口に牡丹咲きにけり

津田玲子

幹

やす保